

# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



エミール・アントワーヌ・ブールデル  
(一八六一年-一九二九) フランス生  
《ロダンの肖像》一九〇九年 フロンズ  
五六×三三×三三.五cm

「私のあらゆる組立ては、ロダンの芸術をまとめていた法則とは全然、反対なもので、私の出发点もまた、全く彼とは反対なものなのである」と述べるに至ったアントワーヌ・ブールデルは、長年ロダンの助手を務めるも結局は師の下には留まらなかった。しかし、師に対する敬意は保持し続けたようで、一九〇九年頃には、ロダンの顕彰碑制作を構想する。この顕彰碑は実現しなかったが、構想の過程で、本作のような胸像が生み出された。肖像的要素の強い本作では、正面から捉えた容貌の力強さと全体のシルエットにみられる微妙な幾何学性とが絶妙な拮抗をみせている。

(学芸課長 三谷理華)

No.  
**120**  
2015年度 | 冬 |

# 美術館草創の頃、そしてこれから

館長 芳賀 徹

今からちょうど三十年昔のことである。

私たちの静岡県立美術館は一九八六年（昭和61年）四月十八日に開館記念式典を行い、すぐ翌日から一ヶ月半にわたって記念展「東西の風景画」を開催した。県議会がその百周年記念事業の一環として美術館建設を決めたのが一九七八年（昭和53年）というから、計画は九年近くをかけて慎重に進められてきたのである。

初代館長、中国美術史の大家鈴木敬氏は早くから建設準備室の参与となり、その下に下山肇、吉岡健二郎、越智裕二郎、小針由紀隆氏ら、後に館長、学芸部長などになる実力派がスタッフとして次々に着任したのだから、頼もしい。一九八一年には当館の資料収集の基本方針の一つを「十七世紀以降の東西風景画」と定め、その二年後の八三年春には早くも『県立美術館紀要』の第一号が創

刊されている。本館学芸員はまず第一に学者たれ、研究者たれ、との鈴木氏の指導方針、という以上にイデオロギーが、さつそく実効を顕し始めていたのだろう。大学でも美術館でも、草創期とは、超多忙であつても熱気と野望と活力に富み、参画者はみな生き甲斐を覚えて励むものだ。それに当時は今と違って、毎年、億単位の莫大な作品購入予算もついていたはずである。

私も開館記念の「東西の風景画」展を見に来ていた。一九八六年の古い手帳を探し出してみると、五月十七日土曜日に当時私が主任教授をしていた東大駒場の大学院比較文学比較文化の学生約十名を引き連れてはじめて来館している。その院生たちのなかには、韓国の秀才留学生も、今橋映子・理子姉妹とか佐伯順子とかの才媛たちも加わって、大いに賑やかだった。展示には雪谷等顔、渡辺始興、蕪村、文晁、それに浦上玉

堂の『凍雲飾雪』があり、岸田劉生『切通しの写生』、小出楢重『枯木のある風景』など近代洋画の名品もあり、さらに主としてメトロポリタン美術館から借りたというロイスター、グアルデイ、コロ、シスレー、ウインスロー・ホーム、カンディンスキー、デュフィ等々を並べて、まことに花やかで充実した大展覧会であった。

私自身は当時大学院で「瀟湘八景から近江八景へ―風景の比較文化史」という演習を二年ほどかけて行い、ちょうど同題の論文を執筆中だった。それでこの静岡で、東博蔵・国宝の南宋末期の『瀟湘臥遊図巻』という大作（383×400.4cm）をつぶさに見せて貰うのが第一の眼目だった。私たちはこれを隅から隅まで眺めて楽しみ、ときに作品の前でわざと「臥遊」までしてみた。美術館も私たちがまだまだ若かった。

あれから三十年。収蔵品はふえた

が、その分、館は古くなり狭くなった。だが私たちは、総務課も学芸課も創立期に負けぬほどに意気軒昂として、広い長い展望の下にこれからの使命を果してゆかねばならない。県民の「ニーズ」に応える、などというケチな根性、薄汚い言葉は棄てつつまおう（needsとは「便意」の意味）。むしろ老若市民のひそかな要望を掘りおこし、それを世間への迎合なしに高い水準で眼前に実現してゆくのが研究美術館の本分というものだ。富士宮の富士山世界遺産センターとの連携・協力も差し迫っている。本年四月には『静岡県立美術館三十年』の刊行も予定している。

四月からの「東西の絶景」展や「徳川の平和——250年の美と叡智」展も、あらためて世界史への再考を促すほどのインパクトをもつはずである。館内でロダン翁に見つかつて、*‘Avez-vous bien travaillé?’*（ちゃんと仕事しましたか）と訊かれたら、*‘Mais, oui, Monsieur!’*（もちろんです、先生）と一斉に答えてやろうではないか。



池大雅《蘭亭曲水図》部分 当館蔵

# みらいの大人へ贈り物を

「子どもが芸術・文化に出会う、キッズアートプロジェクトの応援」

副館長 坂田芳乃

「私の住んでいるところには美術館がなく、行ったこともなかった。小さい頃に美術館に行く機会があったら、絵をもっと身近に感じられたかもしれない」。平成二十三年、県立美術館で大学生と懇談したときの女子学生の発言です。子どもに美術館に来てもらう仕掛けをしよう！と思わせるインパクトのある一言でした。

小学校の先生に何うと「学校のカリキュラムに余裕がなく、美術館鑑賞を組み込められない」「家庭でも美術館に出かける習慣がない」等の返事が返ってきました。当時の県立美術館の展覧会を鑑賞する小中学生の割合は、六%前後と低く、県内の美術館も、当館と似たり寄ったりの状況にありました。幾人かの美術館関係者が集まり、子どもが来ないことを嘆くより、美術館や博物館で何ができるか知恵を絞り、「静岡県の小

も、無料で美術館等に展示された絵画や彫刻などに出合えるチャンスをつくろう」と、静岡市内の美術館、博物館等呼びかけ「小学生専用しずおかミュージアムパスポート」を製作することとしました。平成二十四年一月、未来の静岡の文化・芸術を支えてくれる人づくりを、美術館・博物館連携で応援する「キッズアートプロジェクトしずおか」事業が開始しました。静岡市でのモデル事業で、成功事例を作り、平成二十五年からは、県内美術館四十館以上の参加を得て県内全域での展開を図りました。地域の美術館職員が小学校を回り、「ミュージアムパスポート」の説明と利用のお願いをすることにも、実行委員会形式から、現在のNPO法人に変更し信頼度を高める組織づくりも併せて行った結果、平成二十六年度、県内小学生二十万四人にパスポートを手渡し、そのうち

利用者は、年度末の累計で四十六%にもなる利用率に関係者も驚かされました。同じ子どもが何回も美術館に足を運んでいるのかもしれないませんが、静岡の子どもたちが日常生活の中で、芸術に触れ、驚いたり、楽しんでりと子どもの感性が一層磨かれるお手伝いがしっかりできていることを確信しました。

本年度は、さらに一歩踏み出し、地域に向いて子どもたちに本物の絵画や同世代の子どものすばらしい感性にあふれた絵画を見てもらおうキッ

ズ美術展を企画しました。とはいえ、そう簡単に本物の絵画を地域に持つていくことはできません。そこで、県立美術館で三十年近く続けている移動美術展とコラボして、移動美術展と同会場で、キッズ美術展を開催し、本物の絵にも出合い、同世代の子どもにも大人にも歓迎されました。とりわけ子どもが生き生きと作品に向き合う姿を間近に見ると、美術館連携で取り組んでいるこのプロジェクトは、将来、確実に成果として開花すると、強い思いをいだくとともに、未来を担う子どもたちへの贈り物の行く末が楽しみでもあります。週末には、家族で美術館や博物館に出かけることが静岡スタイルになる日もそう遠くないかもしれません。



しずおかミュージアムパスポート



本物の作品に見入る小学生（移動美術展）



大人も楽しむキッズ美術展



## 静岡県立美術館開館30周年記念展 「東西の絶景」

モネ、ゴッコンも、若沖も大観も…。

平成28年4月12日(火)～6月19日(日)

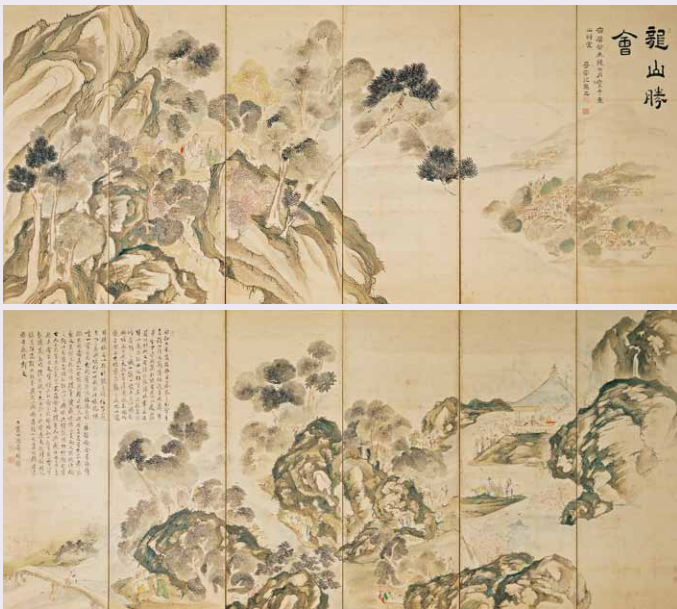
静岡県立美術館は、平成二十八年  
度に開館三〇周年を迎えます。これ  
まで収蔵してきたコレクションは、  
二六〇〇点を超え、皆様のご協力に  
より大変充実したコレクションとな  
っております。主なコレクションの  
テーマは、「十七世紀以降の東西の山  
水・風景画」。このテーマは、遠州か  
ら駿河湾、さらに伊豆半島にいたる  
長い海岸線、自然の良港、数々の川  
や山が織り成す起伏にとんだ地勢を  
もち、我が国を代表する富士山や浜  
名湖をはじめ数多くの景勝地にめぐ

まれた静岡県の特性をもとに設定さ  
れた収集テーマです。また時代につ  
いては、西洋の風景画の成立が十七  
世紀とされることから、日本美術も  
それに合わせて設定されています。

さて、これまでも開館を記念し  
た展覧会では、多様な視点で収蔵品  
を活用した展覧会を企画してしまし  
た。開館十周年を記念した「風景と  
の対話」では、二八〇点の厳選され  
たコレクションを第一期「十七世紀  
から十九世紀」、第二期「十九世紀か  
ら二十世紀」、第三期「現代―『風景』  
から『外界』へ」という三期に分け  
て展示し、人々が風景とどのように  
対峙してきたかを検証しました。ま  
た開館二十周年には、「コレクショ  
ン二十年の熱情」を二部に分けて企  
画し、第一期「心にひびく風景画―  
富士山からセザンヌ、ゴッコンま  
まで―」では、富士山をはじめとする  
「東西の風景画」を一堂に展示しま  
した。第二期では、「時代を超える  
個性―若沖・クレイから戦後アメリ  
カ美術まで―」として、若沖はじ  
めとする当館の風景画以外のコレク  
ションを、いつもとは違う切り口で  
紹介しました。

今回は、三十周年を記念して、「東  
西の絶景」をテーマに当館の風景画  
コレクションの優品を紹介すること  
で、「東西の風景」それぞれの特徴  
をじっくりとご覧いただきます。そ  
のなかで、風景を題材とした日本に  
おける伝統的な表現、西洋伝来の技  
法と日本の伝統的表現とを融合しよ  
うとした日本人による油彩画、日本  
人画家たちに大きな影響を与えた西  
洋の近代を中心とした風景表現、そ  
して戦後から現代へとつながる多様

な風景の有り様を当館コレクション  
によって紹介します。  
まず第一章では、中世から近代ま  
で、風景を題材とした日本画の逸品  
を紹介します。池大雅《龍山勝会・  
蘭亭曲水図屏風》(国指定・重要文  
化財)や近代日本画を代表する横山  
大観による《群青富士》など、日本  
美術の優品をご覧いただきます。ま  
たコレクションの広がりを示すもの  
として、伊藤若沖《樹花鳥獸図屏  
風》なども展示します。



池大雅《龍山勝会・蘭亭曲水図屏風》(重要文化財) 1763 (宝暦13)年 紙本着色 六曲一双



伊藤若沖《樹花鳥獸図屏風》(右隻) 18世紀後半(江戸時代) 紙本着色 六曲一双



須田国太郎《筆石村》1938（昭和13）年 キャンヴァス、油彩



クロード・モネ《ルーアンのセーヌ川》1872年 キャンヴァス、油彩



白髪一雄《屋島》1965（昭和40）年 キャンヴァス、油彩

第二章では、徳川慶喜《風景》、平木政次《富士》、佐伯祐三《ラ・クロッシユ》、須田国太郎《筆石村》といった「日本人の油彩画」を紹介いたします。明治になると西洋から本格的に風景画と油彩画が日本に入ってきました。西洋伝来の油彩画は、日本の風景画に何をもたらしたのか。当館の厳選された日本洋画コレクションを通じて、日本人が西洋伝来の油彩画をいかに受容し、日本独自のものとして展開していったのか、日本人と油彩画の関係について見つめます。

第三章では、クロード・モネ《ルーアンのセーヌ川》、ポール・ゴーギャン《家畜番の少女》、ポール・シニャック《サン・トロペ》、グリモアの古城》など、近代を中心とした西洋絵画を展示します。西洋の自然景観の描写は、十七世紀前後には一つの絵画ジャンルとして確立します。一口に風景画と言っても、理想的、牧歌的、写実的など、異なる様式や表現があり、それは時代や国、作者や人々の思想・嗜好などを反映しています。この章では、風景画の理論や技法、また絵画材料の発達などによって目まぐるしく展開・変遷した十九世紀から二十世紀半ば、す

なわち近代の西洋風景画をご覧いただきます。

第四章は、「今を生きる美術館」として、現代美術を紹介いたします。当館は、現代美術を収集・展示することを重要な使命として活動してきました。今回は、展覧会のテーマである「風景」をキーワードに、一見して風景が描かれていない作品も取り上げてみます。例えば、ジョアン・ミツチェル《湖》、アンゼラム・キーフアー《極光》に加えて、具体美術協会の主要メンバーである白髪一雄《屋島》、元永定正《作品》なども紹介いたします。また他にも、今を生きる

人々の苦悩や葛藤といった心の風景を描いた石田徹也《飛べなくなった人》、《燃料補給のような食事》などの作品を紹介いたします。

最後の章

は、コレクションの収集と保存がテーマです。美術館にとって、作品を展示するだけでなく、作品を収集・保存することも重要な活動です。また収集は購入だけでなく、多くの方々から、貴重な作品をご寄贈いただくことでも成り立っています。ここでは、まず、コレクションの核ともなっている、ご寄贈作品を紹介します。

更に、作品に付属する書類や箱などもご覧いただけます。ふだん、展示室には、作品本体だけが展示されますが、収蔵庫の中では、このような付属品も併せて保存されています。これらから作品についての情報が得られることもあります。例えば、展示予定の川村清雄《海底に遺る日清勇士の髑髏》の箱には、その制作にまつわる秘話が墨書されています。

多くの皆様のご協力によって、三十年をかけて築き上げてきた当館コレクションが、「絶景」という名のもとに、新たな風景を描くことを期待しております。

（上席学芸員 泰井良）

※会期中に展示替を行います。



# 少女表象をセクシュアリティから 論じることの困難さについて —「美少女の美術史」余滴

上席学芸員 村上 敬

はじめに

本年度美術界の一大事件として春画展の開催（永青文庫）を挙げることができたろう。将来された作品もさることながら、英国で好評を博したこの展示を日本に巡回させる上でのさまざまな反応は、美術と性表現との関係を日本社会に問いかけた。

いっぽう当館では昨年度、少女表象を主題に据えた共同企画展「美少女の美術史」を開催している<sup>①</sup>。この企画の前提には、現代日本において、少女を主要モチーフにした漫画やアニメーション、美術作品が大きな存在感を示しているという認識がある。

もとより「少女」と「女性」は完全に重



「美少女の美術史」展静岡会場展示風景

なる概念ではないが、後者が前者を包含するという意味で近い問題をはらんでいるのではないだろうか。この機会に美術における少女表象についてふたたび考えてみたい。

## 一、ジェンダー論をめぐる

わが国の視覚表象における少女のあらゆる方を考えるために、手始めにジェンダー美術史学の成果を参照してみよう。知らず知らずのうちに内面化される規範的な視線を括弧に入れ、まなざしの対象としてもっぱら消費される側に立つ——こういった立場を標榜するこの学派は多く女性表象を取り上げるが、それはたとえつぎのようなかたちにおいてである。若桑みどりの話に耳を傾けてみよう。

われわれの社会の中に流布している女性のイメージは（中略）誰かが、何らかの目的で、何人かに見せる、または買わせるためにつくった虚構である。イメージを生産する者と消費者との間にはりめぐらされた共通の視線があるときに、そのイメージは時代を代表する支配的形式となり、正統的なものとみなされる。したがって男性がイメージの生産と消費の手段や力を握っている社会（中略）では、正統的な、また支配的なイメージは当然男性のそれとなる。<sup>②</sup>

われわれはここから、イメージは社会的

に構築されるものであること、そしていったん描かれたイメージは潜勢的な権力を帯びるものであること、といった参照すべき論点を読み取ることができる。しかし管見の限り、一般にジェンダー論による女性表象分析の解析枠組はジェンダーとしての「女性」を標的としており、より下位の分類水準である「少女」まで降りてこないきらいがあるようだ。少女表象を分析する道具としてはやや使いにくい。

## 二、少女の近代史と少女表象研究の現代史

さて、少女という概念を歴史的存在として捉えるという立場そのものにも当然のことながら歴史がある。そしてその歴史はさほど長くはない。

児童文化論の本田和子は一九八〇年代から少女表象・少女文化の研究を開始する。本田は、日本における少女階層を近代学校教育と少女雑誌によって生み出された存在と位置づける。ことに重視されるのが女学校文化である。本田は女学生について次のように述べる。

彼女たちは、将来の生き方に架橋するすべもないままに、曖昧に宙吊りにされた「現在」だけを楽しむことになる。少女雑誌が照準を合わせたのは、女学生たちのこんなありようだった。すなわち、将来への生活設計とは無縁に、現実の生活をも無視して、徒花のような「いま」だけに語りかけ

る編集……。〔註二〕

近代社会が生んだモラトリアム期間としての少女時代。少女表象研究の基本線となつているこのような認識を形成したのは、本田に加えて大塚英志や川村邦光、久米依子らを含む児童文化論や雑誌メディア論の書き手たちであった。

一方、日本近代美術における少女表象は日本画による美人画と美人画家たちが牽引したと言つてよい〔註三〕。

近代日本画による少女表現は近世日本の美人画を直接の祖先としている。そしてその近世美人画には、つぎのような歴史の堆積がある。すなわち、中世の都市風俗画や祭礼図の群像表現から独立した女性像が生まれ、やがて肉筆・版行の浮世絵美人画へと遷移していったという女性像の歴史がそれである。

最近の日本画研究の中には、近代美人画が官展において圧倒的人気を博した背景に新聞・雑誌といった活字メディアの充実をみる見解も現れている〔註四〕。ここでは日本画に描かれた二次元の女性たちだけではなく、若く美しい現実の女性画家に対する雑誌読者の憧れの視線なども検討の俎上に挙げられており、美人画をめぐる視線の（あるいは「欲望の」と言つても差し支えあるまい）文化を総体的に捉えようという動きが見える。

### 三、まとめ

少女は近代的な社会制度が生み出した一種の理念的存在である。表象メディアとしての美術もそれを描出の対象とするが、奇妙なことにそれは近代的技法である洋画ではなく伝統的技法である日本画が担つていたようである〔註五〕。これにもおそらく深い意味があるろう。

また、少女という概念はセクシュアリティにまつわる表象分析だけでは捉えきれない。このことは、少女概念の本質が、その性的属性よりも、そこからこぼれ落ちる残余の部分にこそあるということであろう。いつけん自明なことのようだが、そのことの意味はわれわれが考えているよりたぶん重い。本稿冒頭では「女性」概念が「少女」概念を包含するという趣旨のことを述べたが、それすら見当違いなのかもしれない。

さて、明治末から昭和戦前期におよぶ少女雑誌文化全盛期から時を経た現代、日本における少女表象の生産はふたたび活況を呈している。その一方で、表現の自由と猥褻をめぐる問題も俎上に載せられている。たとえば少女を描く現代美術家会田誠による個展「会田誠展・天才でごめんさい」（平成二十四年）をめぐる騒動などは記憶にあたらしい。少女表象に向けられる視線になんらかの欲望が含まれていると想定することは間違いではないとしても、それをすぐに「男性による少女の抑圧・搾取」の

現れであるとする権力闘争論的なストーリーは単線的でいかがわしい。少女概念には「女性」であるという前提があることは定義上争えないが、だからといって少女表象の枢要な意味を女性性へと直結することはできない。アートにもサブカルチャーにも少女が氾濫する現代、少女と女性の表象を丁寧に切り分けてそれぞれの意義を丁寧に考えなおす必要があるだろう。

### 〔註〕

- 一 若菜みどり『隠された視線——浮世絵・洋画の女性裸体像』、岩波書店、平成九年、一頁。
  - 二 本田和子『女学生の系譜 増補版』、青弓社、平成二年、一三五頁。
  - 三 少女表象の展覧会企画にあたって最も難しかったのはこのあたりである。ようするに近代日本画における「美人画」には、実際には年若い娘（すなわち現代語で言う少女）が描かれているものがかかり多いのに、「少女画」に類することばが見当たらないこと。さらに、「美人画」という概念が（作品じたいがというよりもそういうカルチャーが）シリアスな美術史論壇では一段低く見られているという現実も混乱を助長する。できることならば「美人画」と「女性表象」を丁寧に腑分けする道具「概念を手に入れたい」というのが本稿を支えるかなり切実な動機。
  - 四 山本由梨『婦人雑誌にみる文展美人画』『近代画説』二十三、平成二十六年、一三六―一八頁。
  - 五 この問題については左記で触れたのでここでは繰り返さない。
- 村上敬「江戸の室内風俗図から明治の外光派少女風俗画へ——少女洋画史への試み」『美少女の美術史』、青幻舎、平成二十六年、二四二―五頁。

### 本の窓

榎原悟  
『狩野探幽 御用絵師の肖像』  
臨川書店、二〇一四年  
門脇むつみ  
『巨匠 狩野探幽の誕生』  
朝日新聞出版、二〇一四年



江戸初期の巨匠・狩野探幽は、一昔前、あまり人気がなかったが、当館で『狩野探幽の絵画』展を企画した山下善也氏（現東京国立博物館）や安村敏信氏（萬美術館）等の活動があり、探幽再評価の機運は近年目覚ましい。その象徴は、榎原氏、門脇氏の著作が、昨年相次いで出版されたことであろう。私は同年に『探幽3兄弟』展（於群馬県立近代美術館）を企画し、両氏と合同調査をした関係から、二者の刊行を心待ちにしていた。榎原氏は、探幽の文献資料を博搜しつつ、作品論を基軸とし、その芸術活動の全貌に迫る。門脇氏は、探幽をめぐるネットワークや兄弟との関係に注目し、探幽芸術の基底を明らかにすることを試みる。真摯な作品分析が展開される点も両著の特徴だが、そこから探幽像へと迫るアプローチの仕方に両氏の独自性が認められる。一般向けと言つては余りに本格的な研究書だが、両氏の熱意ある作品論は、一般の読者をも惹きつけるに違いない。

（当館主任学芸員 野田麻美）



# 県庁と美術館

県庁では、文化振興の目標や施策展開の方針等を明らかにし、県の文化振興施策を推進することで、個性豊かで創意と活力あふれる地域社会の実現に寄与するために、平成二十年三月に、向こう十年間を見据えた「ふじのくに静岡県文化振興基本計画」を策定しています。私たち文化政策課は、この計画の実現に向けて様々な事業を実施しています。その中で私は、「美術館が県民生活にとって潤いをもたらす場となる」よう、美術館職員と連携しながら業務に従事しており、自分の感じたことを通して、仕事の一部を紹介したいと思います。

一つ目は「子どもたちの文化芸術鑑賞推進事業」です。「子どもが本物の文化に触れる機会の充実」を図るため、美術等の鑑賞機会を提供するこの事業は、平成十五年度から二十六年まで、県内中学生六万三千人以上を招待し、県立美術館が企画する優れた展覧会の鑑賞を通して、子どもたちの豊かな心を育むことを期待しています。学校に戻った子どもたちから、鑑賞後の喜びの声が寄せられたときの達成感はひとしおで、充実感は格別のものがあります。

二つ目は、美術館運営に関する予算事務への関与です。美術館職員は、県民の皆さんに有意義な場を提供できるよう、様々な視点から展覧会等を企画しています。概念的には理解していたつもりでしたが、それ

## 文化政策課文化施設班 西尾 稔

を実際に肌で感じ、さらに、その一端を担う現在の仕事は困難な場面もありますが、今後の人生において活かせる貴重な経験をしていると感じています。

我々は、これからも県民に愛される美術館を目指して様々な事業を実施できるよう努めていきたいと思えます。

皆さんの期待に応えられるよう、美術館の魅力を高め、来館する方がさらに増えるように・・・



県庁内執務室

### 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)  
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

### アクセス

- ◎JR「草薙駅」から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737  
ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

無料託児サービス  
毎週日曜日および祝日10:30～15:30  
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。  
※詳細は美術館学芸課までお問い合わせください。  
(Tel: 054-263-5857)



## 風景とロダンの 静岡県立美術館

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2  
総務課 / Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767  
学芸課 / Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742

### 徳川家康公顕彰四百年記念 ムセイオン静岡・グランシップ 静岡×徳川時代

徳川(江戸)時代の静岡県をテーマ芸能・文化のジャンルに注目した連続講座です。  
1講座単位のお申し込みもできます。

1月16日(土)14:00～

会場 静岡県立美術館講堂  
講師 芳賀 徹(静岡県立美術館館長)  
「徳川日本の美術と博物趣味」

お問い合わせ・お申し込みはグランシップチケットセンターまでご連絡ください。  
電話 054-289-9000

### めぐりアート静岡

「めぐりアート静岡」は、静岡大学の「アートマネジメント力育成事業」の一環として平成25年度から始まった、今を呼吸する作家を紹介する展覧会です。市内外にある会場を舞台に、8名の作家がこの土地との交わりを多様な切り口で表現します。

県立美術館では、エントランスホールと県民ギャラリーを会場に展示を行います。

URL：<http://www.megururi.net>



めぐりアート静岡

2016年1月26日(火)～2月14日(日)

\*県民ギャラリーは2016年2月2日(火)～7(日)まで

主催 静岡大学、静岡県立美術館、静岡市美術館  
助成 平成27年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業

お問い合わせ 静岡大学アートマネジメント力育成事業事務局  
電話 054-238-4876 (平日10:00～16:00)

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。